

ことでリズムが安定する。同様に The development of the westerly wave to form a Baiu flow pattern in East Asia and a monsoon flow in India is investigated. という文も is investigated の位置が悪い。この場合は is investigated をそのまま文頭には出せないで、能動態にして We investigate とするか It is our task to investigated とでもする。しかし多くは文頭に副詞があるもので、あれば Next [あるいは In the following pages] is investigated...とすればよい。

また一般的に言って文はなるべく短く、20~30語まででまとめることが作る上にも読む立場からも好ましい。もちろん、良く組立てられておれば、100語を越えてもそのまま抵抗なく読者の頭の中に入って行くものであるが、そういう文章を書くことは大へんむずかしい。

以上、思いつくままに色々こまかいことを述べて来たが、実は一番たいせつな事は、英語の文章の背後にある論理的な思考を体得することである。一つ例をあげてみよう。「世人は大器晩成と言うが、私ももう40を越した」

という文章を英語にして People say that great talents are slow in maturing, but I am over forty now. としたとする。文法上は完全であるが、これは英語としては何か一本たりないのである。なぜかという、but という語は It is spring now, but it is still cold. のように、普通ならば両立しないような statement をつなぐ役目をするのである。ところで上文では「大器晩成」と「40を越したこと」とは直接関係が無い。両者を論理的に結びつけるには中間に何かもっと statement があるべきで、そこを日本語では「が」があいまいにぼやかしているのである。英文としてつじつまを合わせるためには People say that great talents are slow in maturing, but I must not be idling away my time now that I am over forty. とでもしなくてはなるまい。特に論文体の英語では何よりも論理が明確にたどれることが必要である。ここまで来れば、もはやことば以上の問題になって来る。

Prof. John Alan Chalmers 逝く

著書の“*Atmospheric Electricity*”（第1版1949年、第2版1957年、第3版出版準備中）でまた1965年に東京と札幌で催された雲物理国際会議に来日して、日本の気象学者とも親しかった J. A. Chalmers 教授は、1967年3月14日にダーラムの病院で数週間の病気の後になくなった。

彼は1904年にロンドンで生まれた。1928年ケムブリッジ大学を卒え、ダーラム大学の物理学の講師になった。そこで学位も得、後には教授に進み、その理学部長も勤め、研究生活の一生を送った。

彼の最初の研究題目は放射能で、学位論文もそれに関

するものであったが、後に関心は大気電気に移り、1938年にパスカルとの共著で発表した個々の雨滴の帯電に関する研究に引き続き、この方面の論文を続々と発表した。なかんずく落下する球によるイオンの選択捕獲、降水の帯電、先端放電電流、地面付近の極作用等に関して重要な貢献をした。

彼は親しく会って知っている人もある通り、温厚な対話型の人物で、最後まで独身を通した。そして若い時からボーイスカウトの運動に熱心で、その役員もし、地域団体の長となり、表彰も受けている。（畠山久尚）